

# 迷ったときはクマに聞け！

太田 京子

夕方から降りだした雨は、しだいに勢いを増し、カミナリも加わった。

ここは、日の出山でいざなのすそ野に広がる林の中。

闇を恐れず動けるのは、自然の中で生きるものたちだ。

その闇を切り取ったようなケモノは、人からツキノワグマと呼ばれている。その名のとおり、胸元には白い三日月型の胸かざりがたたまれていた。

体長一五〇センチ、体重は六十キロほど。四歳のオスグマとしては、並の大きさだ。

日の出山周辺をすみかとして、ときどき、林を抜けて平地に現われる。

林ややぶの中を陰のように移動するので、人にはめったに見られることはなかった。

ぬれた毛皮をプルプルとふるわせると、なれた足取りで音もなく歩く。

嵐の夜は、やっかいな人間たちも活発には動かない。

だから、つい足をのぼして、里まで近づいてきたのだ。それでも用心はおこたらない。雨で光った鼻先を、たてよこ自由に動かして、危険な臭いがかくれていないか気を配る。

ちょうど今の季節、畑はトウモロコシの実りの時期を迎えていた。

しかし、目の前の畑にはなにも植えられていない。隣のリング園の実も、まだ小さくて香りもなかった。

クマの鼻先には、雨をたっぷりふくんだ泥とむれた草のにおいが伝わってきただけだ。

ぬかるんだ地面に、クマのまるい足跡が付き、それはすぐに水たまりに変わっていった。

クマは鼻先をもう一度高く上げ、耳を左右に動かした。まわりの木々は、風の動きに合わせるように体をくねらせている。

背中をさかなでして通り過ぎていった風に、不安を感じ